
保伝説

砂漠の砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

保伝説

【Zコード】

N21771

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

二十五歳、二ートの青年。その自堕落な毎日で、母親がつらいキレイで、無理矢理アルバイトをさせられることが多い。

「一ートからの脱却? (前書き)

これは、最近まで一ート生活をしていた私の日常でもあります。皆様、お楽しみください。

「一ートからの脱却？」

「あんた今年で二十五でしょ！　いい加減、パソコンだゲームだやつてないで、少しでも働いてみる気はないの？」

世間ではお昼と呼ばれる時間帯、俺はゴソゴソと布団の家から抜け出すと、いわゆる美少女ゲームというのを一時間ばかりやつていた。これがまた面白いわ、抜けるわで、サイコーなんですよ。

だから、今日はパートが休みで家にいる母が、突然部屋に入ってきた何かをわめき散らしても、相手にする気はなかつた。

『あわわ、ひどいよ俊也くん、私を馬鹿にしないでよ』

ひひひ、かわいいなあ。俺のカノン砲、砲身がギンギンに上っちまってるぜ。

「あいたたたた！！！　ひ――、何をするー？」

突然母が、俺の耳をぐいっと引っ張つた。

「いい加減にしなさい！　てゆうか、人の話をシカトするなんて、何様のつもり！」

母が俺の耳元で怒鳴るから、鼓膜が破れそうになつた。

「なにするんだよ～。今いい所なんだよ……、あつ」

母は、俺のデスクトップパソコンのプラグをコンセントから引き抜いた。

バチッ、と音がして、モニタがブラックアウト。

「おいふざけるなよ……」

「ふざけてるのはそつち！　私の話を聞きなさい！」

「電源根元から引き抜きやがって、俺の愛機が壊れでもしてみる、絶対裁判所に訴えてやるからな！」

だが彼女は、ふつと壮絶な笑みを浮かべた。俺はそれに圧倒され、押し黙らざるを得なかつた。

「こつからそのパソコンはあんたのものになつたわけ？　それはあ

なたのお父さんと私が働いてつくつたお金で買ったものでしょ？」

「……いやでも実際使つてるのは俺だからして……」

「もう、そんなことはどうでもいいの、今は。それより問題は、あなた今の現状よ。二十五になつて、働きもしないなんて事が、世間でどういうことか分かる？」

「さ、さあ」

「最低の人間つていうのよ。『ゴミよ、屑だわ』

「自分の子供に向かつて、『ゴミだとか屑だとか……』

「別に私は、あなたのこと『ゴミだとか思つてないわよ。でも、世間の人々がどう思うか……』

別に世間でどう思われようと、俺は俺だ。働いたら負けだ。そもそも俺がこんな有様になつたのは、世間体だけを気にして、俺の気持ちを、俺のやりたいことを何もさせてくれなかつたあんたとあの男のせいじゃないか！？

だが、俺は言い返せない。彼女の目が、涙で濡れていたからだ。「あんたを大学まで生かせたのに、私達の希望はあんただつたのに、あんた卒業後働きもせず……。あんた、クラスメイトはみんな社会人として働いていたり、大学院いつて研究したり、それを、あんたは」

「お、俺だって別に、何も努力してないわけじゃないぞ。こうやってノベルゲームをやつているのもだな、将来小説家になろうと、文竜の技術を磨くためであつて……」

それは、半分は嘘だけど、半分はホントだ。

「馬鹿じやない。とにかく……」

彼女は手に持つていた広告の束を、俺に突きつけた。

「これ、何か分かる？ アルバイトの求人広告よ。いきなり就活しろって言つたつて無理だろうから、せめて何かアルバイトでもしてみなさいな。いいわね、今日中に何か仕事を決めて、面接までこぎつけなさいよ！ そうしないと、タダじやおかないと」

そうどこかのガキ大将みたいなセリフを残して、彼女は俺の部屋

から出て行つた。

俺はため息をついて、パソコンのモニタを見た。暗く何も映さぬ液晶。

他の二ートと呼ばれる人が働かないのはどういう理由か分からない。ただ、俺が働けないのには理由がある。

俺の両親も全く知らないことだが、俺の脳には器質的な問題がある。

どうも俺は、物心ついたときから人と違つた。

勉強ができない子供、だつたり運動ができない子供、というのは結構いて、俺もその二つどちらにも当てはまつた。しかし、これが最も重大な問題なのだけれど、俺には社会性がないのだった。友達が作れない子供、というのはなかなかないと思う。少なくとも俺は出会つたことがない、自分以外に。

俺は二十五になる今まで友達がいた試しはないし、これからもできないうであろう。

まあ、自分で自分の評価をすれば、変なところで神経質で、非常に不器用で、つまり社会の中で生きていけないような種類の人間なのだ。

俺が学校で学んだことと言えば、多分それだけだ。自分がどうしようもない人間だという事実、それだけだ。

だから、俺は、もうそんな自分がいやになり、病院へ行つて自分の脳を調べてもらうことにした。理屈で考えて、自分の脳に何か問題があることは確かにようと思われた。

その時、様々な検査を受けた。病院の側は、俺から金を巻き上げようしていたのか、様々な検査を受けさせた。

その結果、予想どおり、俺の脳には発達の障害があることが分かつた。

「確かに君の脳には異常があるよ。でもねえ、これは僕が見たことのない異常でね、多分病名はつけられない。だから、治療方法もな

い。……でもまあ、問題なく日常生活を送っているなら、それでいいんじゃない?」

医者はそう、何となく馬鹿にしたような口調で言った。

予想はしていたことだが、でも、悲しかった。

俺には普通の生き方はできないんだ、その時、そう思った。

「ひひひ、ははは、ふははは」

俺は、部屋の中で静かに笑つた。

俺は、パソコンラックの上に置かれた求人広告の束を見た。まだ両親は、俺に期待をしているらしい。成功しろとは言わないうが、人並み程度の生活はしてほしい、と。

俺は仕方なしに、求人広告を眺める。世の中には色々な仕事があるものだ。

ガソリンスタンド、スーパーの商品の品だし、引っ越しの手伝い……、どれも激しくて、俺には無理だらう。

コンビニでも従業員を募集している。コンビニか、それなら俺にもできそうな気がする。やつてみるか。無理なら止めりやあいいんだ。

知り合いで会うかも知れないので、家の近くのコンビニは止めて、隣町にある「ジユリー・エス」がアルバイト店員を募集しているからそこにしてみようか。深夜じゃなければ、働く時間は三時間ぐらいだし、後はずっとギャルゲーやってエロ動画見て過ごせるし。

じゃあ、ちょっとオニーして気分を落ち着かせてから、電話してみるか!

はあ、はあ、……終わった、果てた。じゃあそのまま、早速ジユリー・エスに携帯で電話だ。チクチクチク……。

トウルルルル、トウルルルル、……

「はい、こちラジユリー・エス花田下郷店です」

でた、おばさんの中だ。くそ、ババアか、俺より年下の女の子とか出ればいいのに。

「あああ、あの、求人広告を見まして……、や、そちらでアルバイトを募集している、と伺った、いや、えーそういう記事を読んだものですから……」

「あら、そう~。じゃあ、ちょっとお待ちくださいね」

「そう言つて、電話に保留音が流れる。確かシユーベルトの「Hリーゼへのために」だ。いや、バッハだったつけ?」

「ああ、もしもし」

今度はおっさんの声。

「すすす、すいません。今度、そちらで働かせていただきたいと思っているのですが」

「あー、そう。私はこの店の店長をやつているのですが。天田といいます。あんた、名前は」

「ま、牧野保と申します」

「年齢は? いくつ?」

「ににに、二十五歳です」

「あー、そうですか。じゃあ、面接しますから、ウチまで来てもらえます? 僕はいつでも面接できるけれど、今日なんかどう?」

「えーー、いきなり今日面接かい。頭は寝癖ボウボウだし、ひげは剃つてないし、なんの準備もしてないんだけど。」

「君、聞いてる? 来るならなるべく早くしてもらえないとい、早い者勝ちだよ。今、後一人は言つてくれると、ちょうど仕事が回つていく感じなんだな」

「わ、わっかりました。じゃあ、今日つかがいます」

「うん、よろしく。時間は、俺がいるのが、あと一時間ぐらいだな。その後一端店を出て、また戻つてくるのが夜中だから、今すぐ来て

「今すぐ、ですか?」

「うん。君家どこだい?」

「花田市の本郷台です」

「じゃあ、自転車なら一十分ぐらいで来られるだろ? だから、3時に
来てね」
「3時ですね。分かりました」
「じゃあそつ言つことで」
「じゃあ、失礼しま……」
ガチヤン、プーパープー。
意外に普通に、面接してもらえるんだな。どうも、俺が話してい
る途中で電話切られてしまったのが気になるが、まあ、そんなもの
だろう。

「一から脱却?」(後書き)

皆様、どうだったでしょうか。この後、アルバイト先で何が起るのか。皆様、お楽しみください。

ずっと乞食もつてたから、自転車乗るの久しぶりだぜ！ ヒー、おつかねえ。

ああどうじよひ、これから面接か、こんな事ならエロゲーなんてやらずに、身だしなみ整えてれば良かつた。

ああ、それにしても、面接緊張するな、何を言えばいいんだろ？、なんにも思いつかない、まあ、ぶつけ本番だ。

とか考えてぐるぐるうちにジユリー・エス花田下郷店についた。駐輪場に自転車を止める。

あわわ、緊張のあまりえずきが……。

店の前でしばらくためらつて、やつぱり働くの止めようかとか考える。つい一時間ぐらい前まで、俺、働いたら負けだつて思つていなかつたつけ。何で働くつと思つたんだ？それは、要するに母に怒られたからで、俺自身が望んだわけじゃない。

でもまあ、現代社会において、そういう青少年は結構多いんじゃないだろ？

まあ、俺はもう青少年でいうよりおっさんだけど。

なんてそんなこと考へている場合ぢゃない。飛び込んでいかねば。行き先の分からない電車に飛び乗ることでしか、偉大なことはできないって、確かルイ・アルチュセールも言つてた。哲学者の、アルチュセールだ。

何で俺はそんなこと知つてるんだ？ つまり俺は単なる一ートじやないって事だ。

俺は、ジユリー・エスの自動ドアをくぐつまつすぐにレジの店員の所へ向かう。

「いらっしゃいませ、ここにちはー！」

明らかに高校生と分かるレジ店員が、元気よく挨拶する。

俺はガタガタと震え出す、がそれを必死で抑えて、声をかける。

「あの、アルバイトの面接に来たのですけれど」

「そうすると、その店員は何故か含み笑いをして、

「ああ、そうですか。聞いてますよ。裏の事務所で店長が待っています。あの扉の奥ですので、開けて入ってください」と言つた。

俺はゆっくりと扉を開けると、事務所の中に入った。

俺から見て左手に、飲み物の在庫が、そして右側にはスナック菓子などの在庫がおいてあった。

さらに、ブラウン管のモニタがあり、店の様々な場所にある監視カメラの画像が逐一表示されていた。そのモニタの下に、おそらく在庫を管理するためのパソコンの液晶がある。

その液晶モニタの前に、一人の小太りの男が座っていた。

「何だあんた?」

彼はそう言った。

「あああ、あの面接にきたもの、もの、も、も、も、も

「あ～ん、面接!? ああ、あんたが大野ツモ雄君か?」

「いえ、牧野保ですが……?」

「牧野君? そうだっけ」

どこをどう間違えば「オオノツモオ」になるんだ?

「まあいいや。おれっちは来るものは拒まない主義だから、君採用ね

「は?」

ふつう、いくらアルバイトでも、そいつがどんな人間なのか確かめもせずに採用するだろ? うか?

てゆうか、俺履歴書書いてないことに今気がついたんだけど、いいのか? 電話で話したときも、この人履歴書もってこいとも言わなかつたけれど??

「さて、採用したからには、奴隸のようにこき使つてやるから、覚

悟しておくれ

「は？」

「あんたさー、牧野君だつけ？ どうせ顔全体に無精ひげが生える
ような年になるまで働いたことないんでしょ？ 二十五の今まで？」

「え」

それは図星だけど、ふつーそんなこと言つだらうか。いや、言つだ
らうか？？？

「図星つて顔だな。そんな、二十五になるまで働いたこと一度もな
いようなやつ、フツー、アルバイトとはいえ雇つてくれるところない
ぜ？」

「いや……、それは言いすぎなんじや？」

「うるせえ！！ とにかく、今日からお前のご主人様は俺だ！ 家
族よりも自分よりも誰よりも、俺を中心に地球が回つてゐるように考
えろ！ 分かつたか、分かつたら以下の文を復唱せい！ 『私はあ
なたの奴隸です。一生あなたのために奉仕します』ってな！」

俺は自分の頭から血の氣が引いていくのに気がついた。こいつ絶
対頭おかしい、速く逃げ出した方がいい。いや、なんとしても逃げ
ねば……。

俺は、一歩一歩と、店長の方に顔を向けたまま扉の方に向かつて
後退する。今、走れば何とかなる。

だが、俺の背中に突然柔らかいものがぶち当たつた。

「何」

後ろを振り向くと、いつの間にか中年のババアが立つていた。柔
らかいと感じたのは、彼女の今や重力に負けて垂れ下がつた胸だつ
た。

「あらあ、あなたが例の子？ 我が一族が積年の恨みを持つ例の？」

「は？」

何を言つてるんだこのババアは？ こいつも頭おかしいに違いな
い。

「何のこと言つてるのか分からないうつて顔ね？ ムカツク。まあ

いいわ、私がそこの店長の妻で、マネージャーやってるものです。マネージャーって呼んでもらつていいわよ」彼女はそう言つて、右手を前へ突き出した。おそらく握手をしようつて事だろう。

ここで言つとおりにしておかないといと、何をされるか分からぬ。俺は彼女の手を、おそるおそる握った。

そのとたん、握力全開で俺の右手を

「ほほほ、痛い？ でも、これからこの程度

廃人になるまで、いじめてやるんだから」

そう言つてババアは、やつと手を離した。

「あ、あんたたち、こんな事やつすむと悪いなよ。警察呼ぶから

な！」

俺は、もう畠に涙を浮かべながらそう叫んだ。

「ばつかねえ。警察に言いでもして」
即、殺してやるから見てなさい。

۱۵۷

ג' ע' ע' ע' ע'

「二つらホントに氣違いだ。何でこんな奴らが今までの「の」の「の」

生活してんんだ？ おかしいだろ？ 常識的に考えて。

「それにもしても、飛んで火に入る夏の虫とは」の事ね」

「うふふふふ」

店長が、気持ち悪い声で笑つた。

「いや、あの明日香ちゃん、他の店員もこんな事して雇つたのか？」

るべく接客していた高校生の表情を見る限りでは、そんなことはない。

九三

俺たちはこんな事をしているのがどうもこういったら俺は大して何らかの恨みがあるらしい。でも、俺には思い当たる節はないし、第一ずっと部屋に引きこもつて生活していた俺に、人から恨みを買うことなんか出来るわけなかろう。

「じゃああんた。うちの制服に着替えなさいな。そのロッカーの中に入っているから」

「この期に及んでも俺に働くと？」

「は？ 口答えするの？ 奴隸が、主人に」

そう言つと、マネージャーは棚に立てかけてあつた竹刀を手に持ち、いきよに良くな床にたきつけた。

「ひつ！ すすす、すみません」

だめだ。俺は口で何を言われようともう神経が麻痺してゐるから大して堪えないと、暴力をふるわれるのは大嫌いだ。痛いのは大嫌いだ。

俺は慌ててロッカーを開けると、ピンクと薄いブルーの制服を取り出し、シャツの上からはおつた。

「はい、ダメー！」

マネージャーが竹刀で俺を殴つた。

「痛い、痛いよー」

「なんだその着こなしは、エリが中に入っちゃつてるじゃないか！ お前は服も満足に着られないのか」

「そいつは二十五年間ずっと一ートやつてきたような野郎だ。服なんかまともに着られないんだろうさー！」

と、店長。

俺は慌てて、エリを整える。

「もたもたしやがつて。やつと着替えたか！ じゃあ、次！ 挨拶の練習な！」

マネージャーはロッカーの側面に張つてあるポスターを指さした。「これが挨拶のマニュアルだ！ 私に続いて、復唱するように！」

『い、いいい、いい、らつしゃ、らつしゃ、らつしゃいませ～、こ、こ、こんにちわ～』

そんな挨拶の言ひ回しはマニュアルのどこにも書いていない。こいつはどこまでも俺のことを馬鹿にするつもりのようだ。俺は、だからマニュアルに書いてあるとおりに読んだ。

「いらっしゃいませ、こんにちわ

マネージャーが舌打ちした。

「アタイの言つたとおりに復讐しやつていつたはずだ！ なんだその、気の抜けた挨拶は！」

そう言つて彼女はまた俺のことをしないで殴つた。

「痛い！ 痛いですよー」

あのわけの分からぬリズムをつけた挨拶を、俺にじりと叩つのか！？

「もう一度言つてやるから、全部リズムまでもねしろよ。」

「……」

「い、いいい、いい、いらっしゃ、いらっしゃ、いらっしゃませ、
い、こんにちわ～」

「……いいい、いらっしゃ、いらっしゃ、ませ……」
こんにちわ～」

「だめ！ ちが～う」

ババアが、また俺のことを竹刀で殴つた。

「この！ 痛いんだよ、ババア！」

思わずそう言つてしまい、しまつたと思つたときにはもう、竹刀の先が飛んできていた。「この、がきが、だれが、ばばあだつて、次いつたら、ショック死するまで、殴つてやるから、な」

ババアは、俺のことをメチャクチャに殴つた。もう、声も出ない。

「ナニヤア（後書き）」

さて、保君の今後はいかに？

竹刀で殴られながら、変な挨拶の仕方を教えてられて、体中痣だけになつた頃、ようやく挨拶の練習が終わつた。

「やつと憶えたようね。いつとくけど、お客様の前で教えたとおりに挨拶しなかつたら、マジで殺すわよ」

「は、はい……」

素直にはいと言つておかないど、また何をされるか分からぬ。

「じゃあ、次からレジやつてもらひながら。いつとくけど、ミスしたら処刑よ」

「は、はい……」

僕とババアは、事務所から出るとレジに向かつた。レジでは先ほど高校生が仕事をしていた。

「じゃああんた、じつちのレジやつてね！ 私は後ろで見てるから、やるのよ……」

「は、はい……」

「さつきから、ハイとしか口きかねーけどよー。なんかあたしに言いたいことでもあんのかよー！」

「いいえ、そんな、滅相もない！」

僕は慌てて否定する。ここは従順に、従順になつて、僕のシフトの時間が終わるのをまとう。まさかこいつらも今日一日中僕を拘束することはできないだろうし、もしそんなことをしたらいつちの両親が探しに来るだろう。そつなつたら警察をよんで、ここいら速攻で逮捕だ。そうしたら逆に、死刑にしてやる！

もつとも、それまでに殺されなければの話しだが。しかし殺してしまつたらこれ以上イジメることはできなくなるのだから、大人しくしていれば、何とかなるだろ？

「お前今、大人しくしてれば自分のシフトが終わつて解放されると

でも考えてたろ！」

「このくそババア、鋭い！」

「残念だつたな！ 私達はお前を死ぬまで拘束しておくからな！」

そのぐらいの力が、私の夫、オーナーにはあんのよ…」

馬鹿な。コンビニの店長程度の人間が、戸籍に載っている人間を拘束して、しかもそのことをもみ消すなんてことできるわけがない。俺がこんな理不尽な目に遭っているのに、となりのレジの高校生はただ淡々と客をさばいてゆくだけだ。ひょっとしてこいつもグリルか？

「何故、俺をこんな目に……」

思わず口からそんな言葉が出てしまった。

「ふん。そのことが分からないつてことが、お前の一番の罪なんだよ」

そう言つたババアの顔は、どんな感情を表出しているのか読み取れない複雑な表情をしていた。

不意に、三十代の工場労働者とおぼしき男が、カツプ麺と500ミリリットルのペットボトルと漫画雑誌を持つてレジの前に現れた。

「おら、てめー挨拶しろよ」

ババアが小声で言つ。

「い、いいい、いい、いらっしゃ、らっしゃ、らっしゃいませー、
ここ、こんにちわ～」 僕は教えられたとおりに挨拶した。

「はい？」

男は怪訝な顔をした。

「ふつ、ばつかじやねーの、そんな挨拶の仕方、あるかよ」

ババアがまた小声で言つた。

「すいませんねー。この子ちょっと頭がたりないみたいで、挨拶もまともにできないんですよ。さつき教えたのにねー」

ババアは、猫なで声でへこへこしながら話す。それにしても、頭がたりないだと！

「おーおー。そんなやつ雇うなよ」

男は俺の方をちらりと見て、それから馬鹿にしたよつて口元をゆがめると、言った。

「ええ、でも働き口がないなんてかわいそそうだと思つてね、ひょりとたりなくとも、まあ何とかなるかと思つて雇つたんですがね」

「ふーん。コンビニの店長なんてのは意外と優しいんだな」

そんな会話をしながらも、ババアはレジをつか、商品を手際よく袋に詰めてゆく。

「牧野君、ほら、ぼさつと見てないで少しほは手伝つてね」

彼女はそう、いかにも優しいお母さんといつ風に言つた。

「じゃあ、ありがとわん」

そう言つてその男が店から出て行くと、途端にババアの態度は一変した。

「おー、今度変な挨拶して、もしも店にクレームがついたら、竹刀で両回殴つてやるからな」

「いや、でもそれはあなたがさつき、教えたとおりに挨拶しただけで」

「……口答え？」

そう言つとババアは、俺の右頬をビンタした。ベチン、と凄い音がする。

「口答えか？ 口答えするなら、もう私、お前にレジとか接客とか教えないからな。全部一人でやれよ！ 困つても教えないからな」

そう言つと彼女は、つかつかと歩いて、事務所の中へとさつていった。

はっきり言つて、彼女がいない方が助かる。レジは打てないが、となりのレジにいる高校生に助けてもらえば、何とかなるに違いない。彼は普通の人っぽいか。

「あのー、すいません」

俺は、その少年に話しかけた。

「はい。何でしょうか？」

「俺、レジの打ち方分からんんだけど、マネージャーも教えてくれないみたいだし。君、悪いけどお客様がいないう間に教えてもらえる？」

そつぱつと、少年は右側の眉をつり上げた。

「は～、お前誰に向かつてそんな口聞いてるのー?」「え?

三

「お前さー、俺は職場の先輩なんだけどなー、その先輩に向かつてなんだよその態度は！？」

俺は、もう少し少しきで何も口がきけなくなってしまった。自分よりも十歳近く年下の人間に、そんなことを言われるなんて……。

「とにかく、店長からお前のこといじめていいって言う許可が下りてるからな！ 徹底的にやつてやる。田頃の鬱憤を晴らしてやる」

俺は、何か言おうと思つて口を開きかけたが、もう何をしてもの状況は打開できないと思い、押し黙つた。

その時俺の方のレジに、中学生ぐらいの客がペットボトルとカツ
ブ焼きそばを持って現れた。

「アーティストの才能を発揮するためには、必ずしもアーティストとしての経験や知識が不可欠だ。」

俺はとりあえず、普通に挨拶してみる。

俺はここで固まつてしまつ。レジ

スキャンしなければならないだろう。それには、バーコードリーダーを近づけて……。しかし、その後どうするんだ。商品が複数あるぞ。

中学生は、怪訝な顔をして俺の顔をうかがつた。

「ちつ」となりのレジのあのムカツク少年が、舌打ちしてこちらにやって

九
一〇

「ごめんね。このおじさん、ちょっととろくてさ。何度レジうちを教えても、全然憶えないんだよね」

そう言いながら、彼は手際よくレジをうが、商品を袋に詰めてゆく。俺は屈辱に耐えながら、その様を見ているだけしかなかつた。

「へへ、大人なのに、レジも打てないんだ……」

中学生はそっぽそつとつぶやいた。当たり前だろ、俺はレジうちなんて一回も教わつてないんだぞ。

「そうそう。ごめんね……」

ムカツク少年はそう言ひながら、にやつと笑つてこぢらを横目で見た。

俺は屈辱で震えていたが、何も言えなかつた。

中学生は、商品を入れた袋を持つと、去つていった。

だが、その後すぐに、今度は四十代の主婦といった感じの女がレジにならんでいた。

「じゃあ、仕方ないな。俺がレジ打つてやるから、あんたは袋詰めやれよ。そのぐらいでくるだろ！」

そう言いながら、彼はレジ操作をしてゆく。

「ハイ、ボーッとしてないで、袋、袋ー！」

「は、はい」

俺は、レジ台の下に置いてあるレジ袋のうち、ちょうどいい大きさのものと思われるものをとる。

「お前さ、そんな大きさの袋ではいると思つていいの？ この量の商品がさー…」

俺が今とつたのは中サイズぐらいだったから、大サイズじゃないと入らないと言うことだろうか？

俺は慌てて、大サイズをとる。

「ブブー、引っかかった、引っかかった！ お前が最初にとつたやつでいいんですよーだ」

何を言つてるんだこいつは、まあいい、耐えろ、耐えるしかない。

袋詰め。先ず、重くて固い牛乳パックや醤油のペットボトルから詰め、その後カップ麺、最後に形の崩れやすいスナック菓子を詰め

よつ。

「お前、なんて詰め方してんだよー。」

「は？」

「先ず、袋の底を広げて、商品を手に持つたときに安定期するよつに詰めなきや駄目だろ！ そんなことも教えなきやわからねえのかよ」
腹が立つが、この場合にこいつの言つてていることは正しそうだった
ので、商品を全部袋から出して、一つ一つ詰め直してゆく。

「もたもたしないで、さつさとしなさいよー！ あたしは次の花田駅
発の列車に乗らなきやなんないのよー！」

「ひつ、すいません」

こいつめ、この密が急いでいることを知つていて、わざと袋詰め
をやり直させたな！

「まつたくもうー！ あんたこの仕事に向いてないんじゃないのー。」

そう言って、そのおばさんは袋をひつたくつて大急ぎで店から出て行つた。

もう限界だ。あのマネージャーは、俺を絶対逃がさないとこいつ
うなことを言つていたが、そんな馬鹿なことはできないだろ？。こ
のまま走つて、逃げ出せば……。

その時、発信源がどこだか分からぬ音が聞こえた。

「…………もつす…………たすけ…………から」

かなり年若い、女人の声だ。俺は辺りを探すが、この店のどこの
にもそんな女性はいない。

いじめられすぎて、ついに幻聴でも聞こえてきたのだろうか？
だとすれば、俺を精神崩壊させるという店長たちのもくろみは成功
したことになる。だが……、

「あなたは、自力ではその場所から抜け出せない。でも大丈夫、私
が、助け……」

今度ははつきりとその声が聞こえた。ずっと昔に、どこかで聞いた

たよくな声……。

しかし、誰の声だらうへ。

「おこ、お密やくきてるがー。ちつとも接密しない。」

俺はその声で、現実に戻された。

「い、こんなにひな、いらっしゃいませ～」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177i/>

保伝説

2010年10月8日11時42分発行